

ぼくたちの祭りに

ぼくの住む音戸町は、春の新緑、秋の紅葉がとてもきれいな所だ。平清盛が切り開いたとして有名な音戸の瀬戸は、潮の流れが速く、昔は、難所として知られていた。今は、客船や貨物船など多くの船がゆつくりと音戸大橋をくぐっていく。

また、音戸大橋の近くに咲くつつじの花は音戸の瀬戸のシンボルとなっている。



ある日、家に帰る途中、「うずしお会館」に一枚の清盛祭きよもりまつりのポスターがはられているのが目に留まった。今年は、五年に一回になった「清盛祭」が行われる年だった。ぼくは、あまり興味がなかった。しかし、父母からは、

健二、「清盛祭」には出んさいよ。」

と言われていた。親友の太郎も、ウキウキしながら、乗週から練習が始まるみたいだよ。一緒に行こうよ。」

と誘ってきた。

ぼくは、あまり行く気になれなかった。練習は土曜日と日曜日の夜に予定され、自分の自由な時間が束縛されてしまうし、大勢の人の前で踊るのが、はず

かしいからだ。しかし、親のすすめもあり、出るだけ出ればいい。」

と、簡単に考え、行ってみることにした。

練習初日、会場の公民館に出かけると、もうすでに保存会の方々や地域の人が大勢集まっていた。会場の空気も張り詰めているように感じた。ぼくは、保存会の方に熱心に指導してもらい、「投げ奴」の練習を試してみた。保存会の方の、「えい。」やあ。」という大きなかけ声、手と足の動きや踊りなど、とても難しい。安易なぼくの考えは、一気に吹き飛ばされた。「投げ奴」は、四人一組で息を合わせ、渡しながら進んでいかなければならない。練習は毎回二時間にも及ぶものになった。ぼくは、どうしても投げられた毛槍けやりがうまくとれず、何度も落としてしまった。簡単そうに見えた投げ奴は、実際にやってみると毛槍がとても重く、受け取るためには、かなりの力がいった。さらに、手や足の動きがなかなか覚えられなかった。練習には参加してみたが、元々やりたいと思っていたわけじゃない。難しいし、うまくいかないし、怒られるのでだんだんいやになってきた。

何でこんなことをやらんといけないんだろ。」

と、考えていた時だった。投げられた毛槍が、下を向いていたぼくに向かって飛んできた。それを見ていた指導者の坪井さんが、

あぶない。」

と、毛槍を受け止めてくれた。

「じゃきつとせんかい。健二、何回言うたら分かるんじゃ。」
坪井さんから厳しい声で叱られた。ぼくは、謝ることができず、次の日から練習に行かなくなってしまうた。

しかし、なぜか練習を休んでいる間も「清盛祭」のことが気になって仕方なかった。亡くなったおじいちゃんとお父さんが一緒に投げ奴をしている写真が家にも飾られていた。とても楽しそうに見える。

どうして坪井さんは、ぼくをあんなに怒ったのだろうか。
危ないだけではないような気がする……。)
そんなことを考えていると、なかなか寝付けぬ日が続いた。



しばらくたって、太郎が、
健二、練習こいやあ。」
と誘ってきた。

ぼくは、その誘いを待っていたかのように、久しぶりに練習に参加した。いつものように坪井さんは熱の入った指導をしていた。坪井さんと目が合い、気まずい感じもしたが、軽く頭を下げあいさつをした。坪井さんは、

健二、『清盛祭』は、一七五年の古い歴史がある。昭和十二年には、一時から五時半頃まで行列が続いて、出場者は千人くらい、見物客は三万人も来た。当時、中国新聞やNHKで全国放送までされるような祭りで、音戸の宝なんじゃ。一家に一人は出場しなければいけないかった。それくらいみんなが大事にしとった。中でも「投げ奴」は祭りの花形で、憧れの的たのしみなんじゃ。わしも、「一番奴」になった時は、うれしゆうてしようがなかった。親や友だちからも『がんばれよ。』と期待されて、そりゃあ、がんばったもんよ。何回も毛槍を取りよったら、手のひらの皮がむけてどろどろになった。でも、しんどうなかった。その祭りも、しばらく行われんようになった。やっと復活した思うたら、費用がかかるのと道具の修理等の理由で五年に一回になってしまった。すると島の人口もだんだんと減ってきた。」
と、話してくれた。

わしが、ここまでかかわってきたのも、子どもや若い者らのおかげなんじゃ。一緒に練習をしようたら、熱くなるんじゃ。音戸が一つになる様な気がしてのう。生まれ育った故郷じゃけのう。」

と、話は続いた。
ところで健二、なんで、『清盛祭』はみんなに大切にされ、今日まで続いとると思う。」

と、坪井さんから聞かれた。ぼくは、すぐには答えれず、何日も考えていた。

「清盛祭」の日が来た。沿道に大勢の人がおり歓喜の声が聞こえ、みんながぼくたちを見守ってくれている。ぼくは、衣装を身につけ、毛槍をギョツと握りしめ、今までのことを思い出していた。太鼓がなり、祭りが始まると鳥肌とりはだが立ってくるのを感じた。その時分かった。ぼくは、自信をもって言える。

「清盛祭」は、ぼくたちの祭りだ。」と……。

